

春燈



7
月号

櫻桃子の句

蟻に蟻地獄人に妄執地獄あり

自註現代俳句シリーズ『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

自註に「蟻地獄に吸い込まれる蟻を見ると、特攻隊で死んだ若者たちを思う。蟻地獄はウスバカゲロウに変態して残忍で無くなる。人は変態ができない」とある。変態のできない人間には「妄執地獄」が待ち受けている。師は、この「妄執」という言葉の起用により、一句への定着と披露によって、今生の「妄執地獄」から脱出できたのだ。「救い」のある俳句の典型といえよう。

上山 永晃

櫻桃子の句

綿虫も残照も消ゆかりそめとは

句集『素心』昭和五十六年

櫻桃子先生の数多の名句を思い浮かべるとき、私の心の底に音もなく立ちのぼって来るのは、人の世の不条理であり、生きることの悲しみである。先生は透徹した瞳でこれを真摯に受けとめ、そこに一条の光芒と救いとを求めて十七文字という形象にまで昇華して行かれた。かりそめであればこそ等閑に生きることが出来ないという覚悟。これが私の心をいつまでもゆさぶり続けている。

高橋和女

西ヶ原日記 (二十)

鈴木榮子

鮒佐いかなご煮列としもなき列に

大型連休大型就業家籠り

そら豆のとき来て思ふ路地の店

振花らせん階段上りかな
風鈴屋風に商ひまかせけり
蟻穴を失敗をこそ負ふべけれ
薔薇園の薔薇の名前の阿諛めくも
自動販売機冷水売りはいまもあり
キャベツ追加とんかつこそは男飯
ちよつと無理して行つてしまおかパリ祭

〈特別作品〉
(抄)

葛城暮春

末吉治子

麗日の風神鈴を鳴らしけり
肇国の高天原や杉菜長け
一言主うしむ領く山の芽吹きけり
葛城は神奈備の里遅桜
高天彦神見給ふや春田打
金剛山通草かづらの登り径
社前一筋流れ流しぬ花筏
笛吹の森は春禽溢れしむ
神の池金剛山の影も笑み
葛城は父祖の地にして暮春かな

神戸より

藤原繁子

摩耶詣あづけきし母気がかりに
巢籠りのみみづくと目の合ひにけり
山のホテルの珈琲にがし目借どき
三鬼忌やオフィス街の弁当売
朧夜や豪華客船碇泊中
亡き夫の勤務地なりし花は葉に
森青蛙の孵化見てひとり取り残さる
南風にのる南京町の匂かな
ちぬ光る海のかたへの清盛塚
一途なる平家鼯鼠や火取虫

当月集

鈴木 榮子選



○ 渡邊 泰子

あさり飯むかしながらの舟溜り

亡き父を語る魁春花の雲

花街の石畳路地月朧

墨堤に八十八夜の風便り

寺町の路地に大輪白牡丹

○ 横田 初美

耕田式牛も鴉も奏上す(香取神宮田植祭)

早乙女の齡かくせぬ仕種かな

畏みて御空深くへ田植歌

接木せし十年の牡丹咲きにけり

明け方の空の匂ひも夏めけり

○ 荻野 嘉代子

藤房の揺れにこぼるる日のかげら

藤まつりこそぞりて亀の甲羅干す(天神池)

討ち死にもおぼろや寺に血天井(養源院)

連歌懐紙に紹巴自筆も風眩し(勝持寺)

老鶯や屋敷の失せし屋敷林

○ 金子 輝

積み上げし乱歩全集春の闇

破れ樋の日がな繰りごと菜種梅雨

妻の忌の報せ書き終へ桜餅

銀座行く僧の脚半や若葉冷

生ハムの紅透けしメロンかな

春燈の句

鈴木 榮子選

首揺らす混声合唱チューリップ

東京 伊賀山ひでを

遠足の子の列光る白帽子

祖母の文見返す母や花うつぎ
耕して守り通すや相伝領

兵庫 尾崎 貞

天金を吹く幾年の春の塵

分水嶺一氣に越えて黄砂来る
糲るや黒毛和牛の背あたり

コリドー街窓に酌む生ビール

岐阜 瀬戸 峰子

虹色の気泡が風にしやぼん玉

山城のライトアップや八重桜
嵯峨野路や古刹訪ぬる竹の秋

茶を摘むに一芯三葉がけてふことと

東京 小林 文良

ときめきのいささかありし更衣

不機嫌に文鳥啼けり春の地震
竜安寺門前茶屋の蕨餅

更衣ゆとりの風が袖抜ける

山吹や雨中佇む放牧馬

黄沙降る手術を明日の夕日かな

兵庫 福地 淳祐

春眠の覚めやらぬ間に脈とらる

草萌ゆる二人坐るに叶ふほど
江田島の花澎湃と揺れにけり

京都 片山 博介

屋上庭園蜘蛛の囲光る試歩の朝

霧ぐもり仲麻呂家郷恋ひにけり
老山羊に紫雲英の花環つくらばや

長らへし命新茶を淹れにけり

山吹や昨夜の雨の濁り水

リラ冷えや時にはきしむ夫婦仲

千葉 竹内 慶子

若き海女つつけんどんに着替へけり

晒されて春眠永き二面石

東京 豊谷 青峰

新樹光結び目ほどく遺品かな



余言

鈴木 榮子

破れ樋の雨がな線りごと菜種梅雨

金子 輝

雨垂の句である。雨垂くらいと思うが音に敏感な人には気になるものである。わが家もこの状態で三階の後付けロフトのなまくら樋から二階の裏窓の庇に落ちる音が、非常に気になる。工務店を頼むにしても小仕事の割に色々時間がさかれなりと思つことしきりである。

—線りごと—とは雨垂に対する優しい言い様である。

亡き父を語る魁春花の雲

渡邊 泰子

何十年前であろうか、歌右衛門が二人の少年を養子に迎えた。可愛い少年が着物の正装で並んだ姿が新聞に出ていた。高江と松江だっただろうか。その後その高江が梅玉という名優となり、今や大事な役者となった。

当句の魁春はその弟の松江の方ではなかるうか。その兄弟が歌右衛門百年祭興業を立派に飾った。歳月の力をまざまざと見る思いで梅玉、魁春の舞台を嬉しく思った。この二人の名子役時代を見ていないのが心残りである。

水車無音に八十八夜の都会なり

篠原 幸子

立春から数えて八十八日目に当り、五月二、三日になる。二十四節季の一つでまことに俳句の上でも八十八夜の声を聞く気分爽快である。

この水車は少し大きな蕎麦屋さんの窓際あたりに設えてあるのであろう。あゝ今日は八十八夜だったとふと思った作者は、都会の中の水車の水音にも郷愁を感じたのである。

不機嫌に文鳥啼けり春の地震

小林 文良

春の地震というと、どこか情緒的なものを感じるが、動物にはちよつとした自然現象の変化にも敏感になる。籠の小鳥など囚われの身だけに、その不安は想像以上のものがあるう。今まで穏やかに機嫌よい啼き声で、春の日を楽しんでいた籠の文鳥が異常な鳴き声を発したのだ。その変化に作者はびっくりした。見ると鳥籠がかすかに揺れている。あゝそうか、地震でびっくりしたのだと気付き、その一瞬を巧みに詠出したのだ。

(以下略)